愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 12 号
2011.5
39-46p.

金萩遺跡刻書土器小考

池本正明

本稿では金萩遺跡出土の刻書土器に『#』が多い事に注目する。『#』は大陸起源の信仰に登場する九字の略号であることが指摘されているが、名古屋市昭和区に所在する八事小堂跡の存在などを評価すると、密教との関わりを想定できる。金萩遺跡資料はいわゆる純密以前の古密教と呼ばれる段階に属する。古密教はその特徴となる現世利益的呪術性を発揮して、猿投窯の製品流通にも宗教的支援を実施していたものと推察でき、金萩遺跡の刻書土器はこうした修法に関連しているものと考えられる。これは、猿投窯の生産と流通が律令制と関わり深い一面を有していた必然とも言えるであろう。

はじめに

金萩遺跡は、名古屋市東部の丘陵地帯に位置する。行政区画では日進市北新町字金萩で、名古屋瀬戸道路長久手 IC から南西約 1.5km 地点に位置している（図 1）。遺跡は小丘陵の裾部を中心とする緩斜面で、前面に低地が展開する。標高は 60 ～ 80 m程度となる。発掘調査は道路建設を理由として、平成 12（2000）年 6 ～ 9 月にかけて愛知県埋蔵文化財センターが実施している。調査面積は 2500 ㎡で、報告書は平成 16（2004）年に同センターより刊行されている（池本他　2004）。

報告書によれば、調査で確認できた遺構は大きく二時期に区分されている。報告書では前者をⅠ期、後者をⅡ期と呼称するが、ここで問題とするものは奈良時代～平安時代を主体とするⅠ期の遺構群で、鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期にその重心がある。

Ⅰ期の遺構群は竪穴住居と掘立柱建物で構成される遺構群で、金萩遺跡を特徴づける遺構として、ロクロピットが付設された竪穴住居が 1 棟（SB07）と土器集積遺構が 7 か所（SU01 ～ 07）で確認されている（図 2）。

出土遺物は多量で、窯道具や焼成ムラなどが確認できる資料が高頻度となっている。こうした状況から、金萩遺跡Ⅰ期は土器の製作に関わる遺構群で、この場所で同時に製品の二次選別も実施されたことを予測させる。つまり、製品の集荷場としての性格も合わせ持っていたことが確認されている。

本稿はこうした集荷システムに伴う祭祀に検討を加えることを主眼としている。

資料の観察

今回注目したいのは刻書土器である。時期は概ね折戸 10 号窯式に属する。

金萩遺跡では、刻書土器に『#』が、全形を残すものが 3 点、一部を欠くがその可能性が極めて強いものが 5 点出土している（図 3）。この他に、ヘラ記号や性格不明の線刻・戯画などを除く刻書土器は 6 点ある。ただしこれらに共通性を窺う事はできない。

『#』の刻書は可能性のあるものまで含めて 8 点と数量が少ないが、調査面積が 2500 ㎡とあまり大規模でない事から、遺跡を代表する刻書として注目したい。

図 3 に金萩遺跡出土の『#』と刻書された資料をまとめた。遺物番号は報告書の遺物番号を踏襲する。なお諸事情により報告書に掲載されなかった遺構外出土の刻書土器 1638 ～ 1640 もあわせてここで報告する。

1406 が表土出土、1411 が SU05（土器集積遺構）から出土しているのを除くと、その他は包含層出土資料となる。ただし、出土位置の情報を持たない 1406 を除き、全て SU05 とその北側で確認できた SU06 の上面から出土しており、これらが限られた位置にのみ分布している

図１　遺跡位置図（この地図は国土地理院 1:50000 地形図「名古屋南部」「豊田」を使用した。）

ことが確認できる。

刻書の部位は、外底部中央が４点、内底部の中央よりややずれた位置が１点、残り３点が坏部の外面となる。体部外面に施される資料の土器と刻書の位置関係は、1405・1409 が土器を正位に、1410 はこれが天地逆となる。

次に、書順を観察してみる。図３に最後に施される２本を縦方向として拡大図を掲載している。全形を残存させる例では、平行する２本を刻んだ後にこれと直交する２本を刻むものがほとんどだが､横方向を右側から刻むもの（1404･1405）と、左側から刻むもの（1406・1407・1409 ～ 1411）が混在する。なお、1406 のみ縦方向と横方向を交互に刻む。書順に統一性はなく、文字と言うよりも４本の直線を組み合わせた記号となっている。

文字に対する筆順の多様さは、理解度・習熟度の低さを示すとした意見もある（平川 2000）。しかし、筆順の多様さを書き手の「個人内筆順」とらえ、これを理解度・習熟度とは無関係とする考え方も指摘されている（松本 1998）。ここでは金萩遺跡資料に筆順の多様が確認できる事のみに留め、これをどのように理解するかは今後の課題としておきたい。

愛知県下で確認されている古代の墨書・刻書土器は、『愛知県史』資料編４（城ヶ谷 2010）に掲載された集成が現状では最新データと思われる。集成数は墨書土器が 113 遺跡他から 918 点、刻書土器が 127 遺跡（うち窯跡 62）他から 270 点以上となっている。

ここから『卄』の墨書・刻書土器を探すと、墨書土器は若干確認できるが、刻書土器は瀬戸市上品野遺跡と東海市松崎遺跡の事例が知られているのみである（図４）。しかし､､後者は形状がやや崩れたものとなっており、『卄』とは断定できないかもしれない。

上品野遺跡資料は壷Ｇで、刻書は外底部に確認できる。４本の直線のうち１本が短く、これは直交する１本とは交差しない（川添他 2005）。松崎遺跡資料は坏Ｈ身で、やはり外底部で確認できる。時期がやや古く、線刻も交差部分が小さい。線刻は焼成後に施される（福岡他　1991）。

以上の様に、今後資料が増加する可能性も存在するが、金萩遺跡で一般的な『卄』が、県下では特殊な事例である事を指摘しておきたい。

次にこれらの『卄』が、金萩遺跡では刻書土器である事に注目したい。これらの土器群は、特定の用途を想定して金萩遺跡で使用する目的で製作された容器である可能性が考えられる。

図２　金萩遺跡遺構・出土遺物（一部　池本 2004 より引用）

関連遺跡の検討

次に、金萩遺跡の猿投窯の集荷場としての性格を考える。猿投窯は窯跡の分布状況が水系単位で説明される事が多く（柴垣　1997）、流通には河川が利用された事が漠然と想定されている。ここでは、流通に河川が関わった事を前提として、２つの遺跡に注目してみたい。

まず日進市三ケ所遺跡であるが、この遺跡は金萩遺跡と同様の評価が付せられている。

遺跡の位置は、金萩遺跡から直線距離で約５Km。行政区画では日進市浅田町字三ケ所で、日進市立日進西中学校から東へ約 400 m地点に位置している。遺跡は天白川左岸から南東約 200 m地点の丘陵裾部に立地し、標高は約 30

図３　金萩遺跡出土遺物（一部　池本 2004 より引用）

m程度となる。金萩遺跡に近接する福井川は天白川の支流で、集荷場の設定が河川交通を前提とすれば三ケ所遺跡と線上でつなげる事も可能となる。

三ケ所遺跡の発掘調査は、道路建設を理由として平成 13（2001）年～平成 17（2005）年にかけて愛知県埋蔵文化財センターが実施している。調査面積は 3600 ㎡で、報告書は平成 20（2008）年に同センターより刊行されている（永井　2008）。

報告書によれば、調査で確認できた遺構は大きく二時期に区分されているが、主体となるのは古代の遺構群で、溝・土坑などを中心とする（図 5）。

検出された遺構で特徴的となるのは、調査区の南西部から微地形に沿って SD101・102 と

図４　松崎遺跡・上品野遺跡出土遺物（一部　川添他 2005・福岡他 1991 より引用）

命名された並行する二条の溝である。同時期の遺構の分布状況や版築状堆積が確認できない事から、道路状遺構である可能性は否定されている。SD101・102 からは黒笹 14 号窯式期を中心とする焼成不良品や窯道具を含む出土遺物が多量に出土している。

図５に示した資料９点はいずれも窯道具のツクで、遺物番号は報告書を踏襲している。399 は長頸瓶の頸部片を転用したものとなる。出土位置は 71 ～ 74 が SD101 で、206・207 が SD102、295・296 は SD104 と、窯道具は調査区の南西部に集中している。しかし、他の遺物も同様の傾向を示しており、窯道具のみの特殊性ではない。

ここでもう１つ注目できる遺跡が、八事小堂跡である（楢崎　1961）。行政区画では名古屋市昭和区八事富士見ケ丘で、金萩遺跡から東南東へ約８Km 地点に位置している。

この遺跡は天白川と植田川の合流点を南東に見降ろす丘陵頂部に位置している。標高は、75 m程度となる。昭和 35（1960）年に調査が実施され、東西 50 m、南北 20 m程度の平坦面から、火災を受けた東西２m、南北１m程度の小規模な建物跡、その前面には通路の遺構と推定される幅約 1.3 m程度の溝状の平坦部が検出されている（図 6）。

出土遺物は、土器類や瓦類・金属製品などが報告されており、特徴的な資料として灰白軟陶で作られた火舎香炉や花瓶などの仏具が眼を引くが、緑釉緑彩の三足盤（1）も含まれている。

ここで注目したいのは火舎香炉（4・5）と花瓶（14）である。火舎香炉は密教で主として用いる香炉として知られている。また、花瓶は同じ形態のものが２点出土したと報告されるが、図示されている資料はいわゆる亜字形花瓶と呼ばれる密教独自の形態となる（岡崎他 1982）。緑釉緑彩の三足盤（1）は、猿投窯の白眉とも言える精製品となる。三足盤は仏具に限定できないだろうが、緑彩がモチーフとした法相華は言うまでもなく仏教に登場する架空植物である。

以上の様に、建物跡を出土遺物から検討すると密教と関連した小堂宇であったことが考えられる。時期は黒笹 90 号窯式期に属する。金萩遺跡の刻書土器よりやや下がり、平安時代に入ってしまうが、遺跡の位置や出土事例の極めて乏しい緑釉緑彩の三足盤の存在などを評価すると、猿投窯の流通に関わる祭祀施設と考えておきたい。

なお、これら三つの遺跡を結ぶラインの天白川と植田川の合流点よりもさらに西側には、現在『御器所』の地名がある。なお、図１に示す御器所の位置は、現在の名古屋市交通局地下鉄御器所駅を示している。

浅香年木氏は、この地名が『吾妻鏡』建久元（1190）年に登場し、少なくとも平安時代末までさかのぼる事や、その位置が猿投窯と熱田浜を結ぶ線上に位置する事から、猿投窯の尾張国衙の管理機構が存在した事を想定している（浅香　1971）。

図５　三ケ所遺跡遺構・出土遺物（永井 2008 より引用）

猿投窯の流通と密教

次に注目したいのが金萩遺跡で特徴的に見られた『#』の刻書土器である。

現在、記号としての『#』は、陰陽道・道教的信仰・密教等の大陸起源の信仰に登場する九字の略号であることが指摘されている（平川 1991）。しかし、これらは通常は習合した形で存在しており、厳密に分離限定する事が困難な状況となっている。

このうち道教は日本には仏教とともに伝来し、いわゆる教団道教としては成立せずに断片化して登場（＝道教的信仰）するとされている（和田　2006）。また、陰陽道は定義にバラツキがある様だが、もともとは陰陽五行説として仏教に随伴して日本に伝来したものである（下出　1997）。

一方、密教はもともと呪術性が強いため、類似する信仰と融合しやすい性格を内在させている。密教はインドにおいては仏教の中で顕著となるが、やがてヒンドゥー教に浸透し、ジャイナ教を成立させている（立川　1999）。中国では仏教の一部分として密教を導入するが、道教と融合し互いに影響を与え合ったことが指摘されている（坂出　1999）。

また、本稿で問題とする時期に近いもので陰陽道・道教的信仰に関わる資料の県下の事例

図６　八事小堂遺構・出土遺物（楢崎 1961 より引用）

を探すと、史料に『続日本記』延暦 10（791）年９月条に尾張国等の七つの国に対して牛を殺して漢神を祭る事が禁止された記述が存在する他、出土品では８・９世紀に属する一宮市大毛沖遺跡呪符木簡（永井他　1996）や、いわゆる律令的祭祀関連遺物の一部に確認できる（鵜飼　2005）が、いずれも断片的となっている。

以上の点から、ここでは猿投窯の製品の搬出に律令制の関与が伺える事や、年代はやや下がるが天白川と植田川の合流点を南東に見降ろす八事小堂跡の存在なども考えて、金萩遺跡資料に密教との関わりを想定する。

ここで注目したいのが、『小右記』万寿２（1025）年の記載で、ここには災害により失われた大（太）元帥明王像とその仏具を補充するのに、尾張と美濃の土器を用いると記述されている。ここに登場する土器は大元帥修法と関わるものと考えられている（新井　1969）。

この史料の記述内容に、尾張・美濃の土器と阿闍梨が登場する事は注意したい。

日本で言う阿闍梨は、律宗でも用いられるが多くは密教の伝法灌頂を受けた僧を指す様である。一方、大元帥修法は鎮護国家を祈り修された修法で、密教の中では特別の修法として位置付けられている（中村他 1989）。こうした事から、『小右記』に登場する阿闍梨は密教の高僧を指すのであろう。

以上の様に考える事ができるのであれば、金萩遺跡の刻書土器や八事小堂跡の出土遺物は、猿投窯の流通に関連した祭祀に伴う資料として位置付けられ、特に密教との関わりを指摘する事ができる。なお、八事小堂跡資料はやや時期が下がるが、特に折戸 10 号窯式を中心とする金萩遺跡資料は古密教と呼ばれる段階に属する。

古密教はかつて雑密と呼ばれ、空海により日本に持ち込まれたいわゆる純密以前の混沌とした信仰と評価されていた。しかし近年これが再評価を受け、実は奈良時代後半には変化観音教典を中心にかなりの数の密教教典が請来されていた事が指摘されている（頼富　2000）。また、南都六宗の教学を学ぶ一方で古密教の修法を行う僧侶が、七大寺にも多く存在していた様である（内藤　2005）。古密教が正当な評価を受けなかった背景には、空海の業績を評価するあまり、それ以前の密教に関心が持たれなかった結果であろう。

古密教は現世利益的呪術性を発揮して、猿投窯の製品流通に宗教的支援を実施していたものと推察できる。これは、猿投窯の生産と流通が律令制と関わり深いものであった必然とも言えるであろう。

県下における古密教段階の諸資は、現在ほとんど知られていない。金萩遺跡の刻書土器はこうした古密教関連遺物の実例としても重要となるだろう。

参考・引用文献

浅香年木　1971「平安期の窯業生産をめぐる問題」『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
新井喜久夫　1969「文献に現れた尾張陶器」『いちのみや考古』第 17 号　一宮考古学会
池本正明他　2004『金萩遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 119 集
鵜飼堅証　2005「愛知県内の古代祭祀関連遺物 - 律令期を中心に -」『考古遺物から見た古代三河』三河考古談話会
岡崎譲治他　1982『仏具大事典』鎌倉新書
川添和暁他　2005『上品野遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
坂出祥伸　1999「初期密教と道教との交渉」『中国密教』春秋社
柴垣勇夫　1997「古代の窯業」『新修名古屋市史』第一巻　新修名古屋市史編集委員会
下出積興　1997「陰陽道をめぐる問題」『日本古代の道教・陰陽道と神祇』吉川弘文館
城ヶ谷和広　2010「墨書・刻書」『愛知県史』資料編４　飛鳥～平安　愛知県史編さん委員会
立川武蔵　1999「インド密教の歴史的背景」『インド密教』春秋社
内藤　榮　2005「古密教展概説」『古密教 - 日本密教の胎動 -』奈良国立博物館
永井宏幸　2008『三ケ所遺跡・西田面遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 140 集
永井宏幸他　1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 66 集
中村 元他　1989『岩波仏教大辞典』岩波書店
楢崎彰一　1961「八事堂址」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
平川　南　1991「墨書土器とその字形 - 古代集落における文字の実相 -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集
平川　南　2000「墨書土器と古代の地名」『墨書土器の研究』吉川弘文館
福岡晃彦他　1991『松崎遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集
松本仁志　1998「筆順史研究の構想」『広島大学学校教育学部紀要』第 II 部　第 20 巻
頼富本宏　2000「日本密教の成立と展開」『日本密教』春秋社
和田　萃　2006「道術・道家医法と神仙思想 - 道教的信仰の伝来」『列島の古代史ひと・もの・こと７　信仰と世界観』岩波書店